

なぜ都市を問題にするのか

都市民俗学のフィールドワークのころざしに関連して

Why Do We Treat Urban Community as a Question

森栗茂一

- ①なぜ都市研究なのか
- ②都市のフィールドワーク
- ③都市を見る目
- ④なぜ都市民俗学なのか

【論文要旨】

日本の都市研究は、高度経済成長のひずみ、社会問題の反省として発展した側面がある。しかし、十分な議論のないまま、現実の日本の都市の生活は個別分断の消費に突入し、市民の連帯を発見できないでいる。国立大学共同利用機関の都市の共同研究としては、こうした都市の今日状況を視野にいれて、研究の志を立てねばならぬ。子供の自殺や暴力にみられる今日の状況は絶望的である。都市民俗学としては、こうした状況の都市をどう把握するのか、新たな都市の再構築にむけて展望を示す必要がある。

本論では、阪神大震災を契機として、都市の連帯のあり方を問いなおした三人の映画監督・映像作家との会話のなかで発見したことを記述した。震災のなかで活動する人々を撮影するなかで、ふれあう町の可能性をみつけた熊谷博子監督。焼け落ちた町が復興する過程を定点観測しつづける青池憲司監督は、魅力的な個人ではなく町の連帯、人間の町がつくられていく動態を記録しようとしている。また、篠田正浩監督は、災害や戦災にいても生きつづけようとする人々の力、独立市民の登場に期待してカメラをまわしたという。

これらの動きは、本当の意味での都市の誕生である。都市民俗学としては、こうした人々の動き・新たな市民連帯の芽吹きを発見し、観察・記録し、新たなまちづくりに貢献せねばならない。

都市史研究も、研究テーマがあるから研究するのではなく、何故その研究をせねばならぬのか、問われている。そうした、社会に志を問う共同の研究をせねば、研究の意味はない。

何のための共同研究か。何のための共同利用機関なのか。

誰のための研究なのか。誰に訴えたいのか。